

令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第6号（10月予報）

令和3年9月28日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は10月を主とします。次回の発表は令和4年3月25日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

小麦	雪腐病の感染量は、県中央部、県南部ともに平年並と予想されます。ほ場の排水対策を徹底し、連作で春季に発生量の多かったほ場では根雪直前に薬剤を散布してください。
野菜	ねぎ（秋冬どり）では、アザミウマ類（ネギアザミウマ）の発生がやや多いと予想されます。多発すると防除効果が低下しますので、発生初期から防除してください。キャベツでは、モンシロチョウ及びヨトウガの発生がやや多いと予想されます。コナガとの同時防除に努めてください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
小麦	雪腐病	県中央部	—	—	平年並
		県南部			平年並
ねぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや多い	平年並
	べと病	全県	—	平年並	平年並
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
キャベツ	コナガ	全県	—	やや少ない	平年並
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	やや多い
	ヨトウガ(第2世代)	全県	—	平年並	やや多い

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 小麦

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
1. 雪腐病	—	県中央部：平年並（前年並） 県南部：平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、東北地方寒候期予報によると12～2月の降雪量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、3～4月の巡回調査における葉腐れ・枯死面積率は県中央部0%（平年1.6%）、県南部25.5%（平年26.6%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、早播、窒素肥料の多用、リン酸肥料の不足時に発生が多くなるので、適期適量の播種に努め、肥培管理に注意する。

イ、水田転作での栽培は、排水対策を徹底する。

ウ、県内では雪腐小粒菌核病の発生が主体である。連作で今年の春季に発生が多かったほ場では、根雪（平年の初日は秋田市12月6半旬、横手市12月3半旬）直前にシルバキュアフロアブル、バシタック水和剤75、フロンサイドSC、モンカット水和剤のいずれかを1回散布する。

エ、無人航空機で防除を行う場合は、根雪直前にシルバキュアフロアブルを散布する。

オ、薬剤散布後、根雪までの期間が長かったり、多量の降雨があった場合は、再散布を行う（ただし、シルバキュアフロアブルの根雪前の使用回数は1回である）。

カ、根雪期間が100日を超えると被害が著しくなるので、特に、根雪期間が長い県南部では、根雪直前の防除に努める。

B ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. さび病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。
- イ、9月4半旬の巡回調査における発病株率は6.5%（平年3.4%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、軟弱徒長になると発生を助長するので、過剰な施肥は避ける。
- イ、多発すると防除効果が低下するので、発病前の防除に努める。発病を確認した場合は、直ちにアミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル、カナメフロアブルなどを散布する。アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. べと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、9月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、軟弱徒長になると発生を助長するので、過剰な施肥は避ける。
- イ、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早くなるので、発病初期からオロンディスウルトラSC、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZなどを散布する。
- ウ、フェニルアミド系剤、カルボン酸アミド剤（CAA剤）は、耐性菌の出現を回避するため、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、9月4半旬の巡回調査における発病株率は3.5%（平年11.3%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、軟弱徒長になると発生を助長するので、過剰な施肥は避ける。
- イ、秋季の発生は葉枯病が主であり、葉枯病が原因の黄色斑紋病斑は、収穫物の品質低下につながる。アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルを組み合わせて、10月前半まで約10日間隔で散布する。アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。
- ウ、害虫の食害痕やべと病及びさび病などの病斑上に感染する機会が多いので、他の病害虫防除も併せて行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、9月4半旬の巡回調査における食害株率は49.3% (平年49.8%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生源となるほ場周辺及びほ場内の雑草除去に努める。

イ、多発すると防除効果が低下するので、発生初期からアドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブルなどを茎葉散布するか、ダントツ粒剤などを株元散布する。

ウ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

C キャベツ (秋冬どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0.0頭) でやや少なかった (/-)。

ウ、秋田市予察ほにおける9月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は4頭 (平年13.9頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫が見られる場合は、ネライストキシン系剤、アフーム乳剤、グレーシア乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、ファインセーブフロアブル、プレバソンフロアブル5などを散布する。収穫前日数に注意して、薬剤を選定する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.0頭 (平年0.0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ（第2世代）	－	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.0頭（平年0.1頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、秋田市予察ほにおける9月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は4頭（平年4.8頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

IV. 気象予報

令和3年9月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（9月25日～10月24日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる可能性があります。
- ・ 向こう1か月の降水量と日照時間はほぼ平年並でしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
9/25～10/1（1週目）	20%	30%	50%
10/2～10/8（2週目）	10%	40%	50%
10/9～10/22（3～4週目）	30%	30%	40%

令和3年9月24日仙台管区气象台発表 東北地方寒候期予報（12～2月）

(1) 予報のポイント

- ・ 冬の気温は、ほぼ平年並でしょう。
- ・ 冬の降水量は、ほぼ平年並の見込みです。
- ・ 冬の降雪量は、東北日本海側では、ほぼ平年並でしょう。

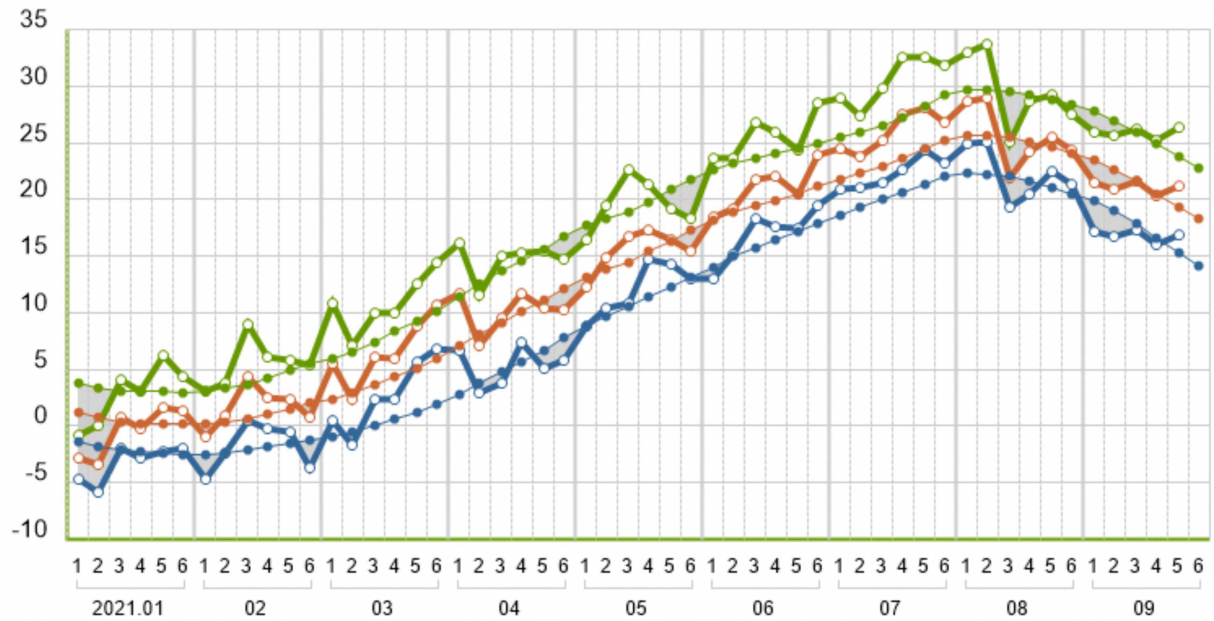
(2) 冬（12～2月）の気温、降水量、降雪量の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	30%	40%	30%
降水量	30%	30%	40%
降雪量	30%	40%	30%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～9月5半旬 秋田県農業気象システムより)

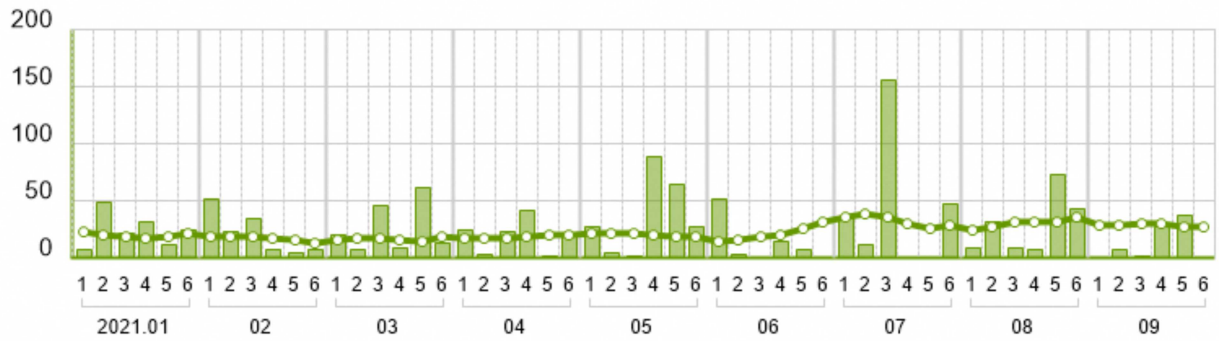
気温℃

○ 平均気温 ○ 最高気温 ○ 最低気温
 ○ 平均気温平年値 ○ 最高気温平年値 ○ 最低気温平年値



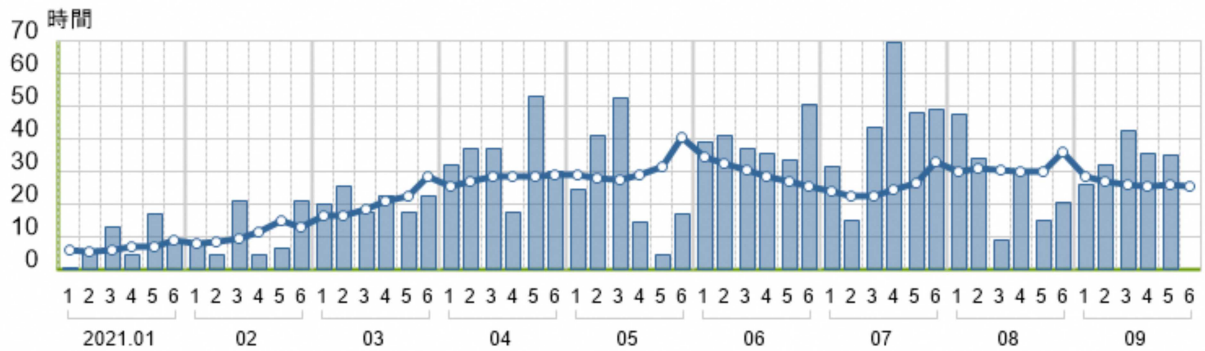
降水量ミリ

■ 実況値
 ○ 平年値



日照時間

■ 実況値
 ○ 平年値



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に十分周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。

- 農薬の取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。